

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：33919

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13476

研究課題名(和文) Managing Interaction: Negotiation and Accommodation strategies in ELF

研究課題名(英文) Managing Interaction: Negotiation and Accommodation strategies in ELF

研究代表者

池 沙弥 (IKE, Saya)

名城大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10738214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最も大きな業績は、スマイルやうなずきなどの言語要素の持つ層的意味の解明である。相槌行動の文化差が明らかになり、また、ELFにおいて言語的要素は共有されていても、その機能や意味の理解が共有されるとは限らないことが明らかとなった。そこで、インタラクションを空間ととらえ、言語的意味(ユーモア、感情など)、構造的意味(発話開始、ターン調整など)、インタラクション的意味(同調、スタンス表示など)、そして社会的意味(ラポールの形成、発展など)を包括的に分析する枠組み(Interactional Space Model)を提唱、実践することでELFにおけるラポール構築過程を可視化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、異なる文化と言語背景をもつ会話参与者同士が、どのように相槌やそれに準ずる言語的リソースを駆使してインタラクションを成り立たせるのか、そして、異なる期待を持つ者同士がどのように互いの言語使用の文化的差異を理解し、会話内でのラポールを構築するのかを明らかにすることができた。これは現代のELF研究におおいに貢献すると考える。また、分析結果から言語的特徴の意味理解だけでなく、それらの持つ社会的意味がELFにおいては交渉されており、それが共有されればお互いに使用できる言語的リソースの幅が増える可能性も示唆された。この点は今後の研究の方向性を決める有意義な成果である。

研究成果の概要(英文)：The major achievement of this research project is identifying multiple meanings and functions of linguistic resources such as smile and nodding in interaction through detailed transcription and multimodal analysis. The research revealed cultural differences of backchanneling behaviour, and that shared linguistic resources do not necessarily contribute to shared understanding of their functions. Based on these findings, a four-layer interaction analysis framework "Interactional Space Model" was proposed. Treating the interaction as a three-dimensional space, this model helps us analyse linguistic meaning (e.g., humour, emotion), structural meaning (e.g., turn opening, alignment), interactional meaning (affiliation, stance-taking), and/or social meaning (e.g., rapport establishment, rapport enhancement) all at once. The framework enabled the researcher to visualise the rapport building process in ELF interactions.

研究分野：Sociolinguistics

キーワード：multimodal analysis smile stance-taking social relation work interactional space

1. 研究開始当初の背景

World Englishes の研究は過去数十年の間に個々のバラエティーの認知という側面では飛躍的に進んだといえる。それは主に植民地支配の過去を共有するアウトサークルの英語にとどまらず、China English (e.g., Hu, 2004)、Korean English (e.g., Park, 2009; Shim, 1999)、そして Japanese English (e.g., D'Angelo, 2005; Honna, 1995; Ike, 2010, 2012, 2014)といったエクспанディングサークルの英語にも言えることである。こうした各バラエティーの認知が進むにつれて、English as a Lingua Franca の研究も近年では進んできており、ELF 会話において参加者はバラエティー間の言語的差異を交渉するだけでなく、文化的差異も交渉していることが明らかになってきた (Canagarajah, 2006; Sharifian, 2009)。しかし、文化や社会的習慣を大きく反映していると考えられる相槌やジェスチャーの使用といった語用論的側面はまだ調査・研究が進んでいなかった。

日本語会話において相槌の使用は非常に特徴的で、相槌の持つ役割は多岐にわたる (Mizutani, 1985)。そこには会話参加者が共同でインタラクションを構築する「協和」という概念が大きく関係しており (Mizutani, 1980)、相槌を使用することによって会話を通して共感・ラポールを形成していると考えられる (Kita & Ide, 2007; Otsuka, 2012)。研究代表者はこれまで、日本語話者による英語 (Japanese English) 会話における相槌に焦点をあて、Australian English との比較を通してその特徴を明らかにしてきた。まず、インタラクティブな側面に注目することで、相槌には話者が引き出すタイプ (Speaker-elicited backchannel) と聞き手がコンテキストに応じて自発的に提供するタイプ (Listener-initiated backchannel) が存在すること、そして Japanese English では両タイプともよく使用されているのに対し Australian English では自発的供給タイプはほとんど使用されないことを明らかにした。さらに、相槌は話者と聞き手がお互いに深く関わりあって表出することから、協働的側面に焦点をあて、相槌の連鎖 (backchannel sequences) の構造と機能の解明を試みた (Ike & Mulder, 2016)。こうした様々な角度からの相槌分析を経て、Japanese English と Australian English ではそもそも相槌の機能が異なること、そして ELF インタラクションにおいてはその機能の差から、お互いの相槌行動やその他のラポール構築行動に対して異なる期待を持っている可能性があることが示唆された (Ike, 2016)。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で述べた背景及び研究代表者らによる事前研究に基づいて、本研究では ELF コミュニケーションにおける協働的インタラクションマネジメント戦略 (Collaborative interactional management strategies) の交渉と譲歩を分析し明らかにすることを主たる目的とした。異なる文化と言語背景をもつ会話参加者同士が、どのように相槌やそれに準ずる言語的リソースを駆使してインタラクションを成り立たせるのか、そして、異なる期待を持つ者同士がどのように互いの言語使用の文化的差異を理解し、会話内でのラポールを構築するのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では① Japanese English、Australian English、Thai English、Korean English および日本語のスピーチサンプルを収集、②日本語と Japanese English、Australian English を中心とした各バラエティーにおける相槌を通したラポール構築機能分析、③その他のリソースを用いたラポール構築機能分析、④ELF におけるラポール構築機能分析を段階的に実施した。

①では共通のトピック (過去に観た、あるいは読んだ面白いプログラムや本) で同バラエティー間で 15 分程度の会話と異なるバラエティー間 (ELF 会話) で 15 分程度の会話を複数収録した。また、比較材料として日本語での会話も複数収録した。

②では会話分析ソフト ELAN を用いてスピーチ、うなずき、その他の頭部の動き、表情、ジェスチャーをすべて書き起こし、トランスクリプションを作成した。そこから相槌の頻度及びその他の表情や頭部の動きの特徴を分析した。日本語会話と Japanese English 会話を比較分析しながら、Japanese English においてみられる相槌行動やラポール構築仮定は日本語に見られるそれと類似していることを確認し、さらに Australian English における相槌行動を分析した。

③では②で確認されたスマイルの使用に焦点を当て、もう一度日本語、Japanese English、そして Australian English をすべて分析しなおした。

最後に④では ELF 会話のトランスクリプションを作成し、バラエティーの特徴がどの程度現れるのか、それは相手に理解されるのか、されない場合どのように交渉しているのかを分析した。特にデータが豊富で分析が進んでいる Japanese English と Australian English の ELF に注目し、具体的な交渉戦術を分析した。

4. 研究成果

(1) 相槌分析から

事前研究で日本人の相槌使用についてはかなり詳細に理解が進んでいたが、本研究で今まであまり焦点を当ててこられなかった **Australian English** における相槌の機能と意義が明らかになった。

Japanese English で頻繁にみられる相槌の連鎖は **Australian English** でもまれに確認できる。しかしながら、連鎖は短時間にとどまることが多く、**Japanese English** でみられるような複数のターンにまたがる連鎖はほとんど確認できなかった。相槌連鎖の分析から、相槌の連鎖は意図して形成されるものではなく、ターン・テーキングの一部として、またスタンス・テーキングの一部として偶発的に生まれる副産物であると結論付けた。一方、日本語と **Japanese English** の相槌行動、特に相槌連鎖においては **Australian English** におけるよりも多くの人間関係調節機能、すなわちラポール構築機能が確認された。つまり、日本語話者は相槌連鎖を協働形成することで、共感を高め、瞬間的なラポールを形成していると考えられる。そこから、**Spencer-Oatey (2004)** が唱えるように、日本語話者と **Australian English** 話者では会話に求めるラポールの方向性が違うことが示唆された。これまで、日本語研究では「ラポール」という言葉がたびたび使用されてきたが英語研究で見かけることはほとんどなかった。それは、各英語バラエティーの「会話」においてラポールが日本語ほど重要な意味を持っていなかったためではないかと考えられる。つまり、ラポールは言葉の選択とポライトネスを通して総合的に形成される人間関係であり、静的なものと考えられていたのである。本研究では、ラポール形成にも二種類あることが示唆された。すなわち、インタラクション全体を通して形成される「結果」としての静的ラポールと、インタラクションの中である行動（日本語話者の場合は相槌連鎖）を通して瞬間的に形成される「過程」としての動的ラポールである。

日本語話者を基準とした頭部の動きに焦点を当てた分析では、ラポール構築は **Australian English** においてどのように構築されるのか、という問いに答えることができなかった。そこで、言語的相槌が確認できる周辺での視線やスマイルに焦点を当てて分析することとした。

(2) スマイル分析から

(1) で明らかになった相槌行動とその機能の違いから、相槌連鎖の代用となりうるものとしてスマイルに注目した結果、スマイルの分析には最新の注意を払わなければならないことが明らかになった。まず、親しい相手との会話でよく見られる恒常的なスマイルと、インタラクションの中で現れるスマイルは区別されなければならないからである。さらには、話者スマイルの中性ポジションを確定させなければならないからである。さらに、そのポジションからのスマイルの程度と長さを可視化することで、スマイルの機能が明らかになった。

第一に、スマイルが独立して一人の話者に使用され、それが聞き手にシェアされないときには、スマイルはスタンス配置指標として機能しているがラポール構築には関与しない。第二に、スマイルの程度が大きく、また頭部の動きと合わせて表出するとき、そしてそれらの動きと表情が話者間で共有されるときには相槌連鎖の中でラポール構築が活発に行われていることを示す。第三に、スマイルやその他の相槌行動が話者間で共有されている場合は、話者と聞き手のスタンスが同期されていることが分かるが、必ずしもさらなるラポール構築が行われているわけではない。どちらかというとならすでに構築されたラポールの維持の機能を果たしていると考えられる。そして最後に、スマイルは一つの独立した相槌として機能することもできるが、スマイルの維持によりインタラクションの中で見られる複数の相槌の瞬間をつなぎ、そうすることで広義の相槌連鎖を生み出し、そこでラポール構築に寄与していると考えられる。

こうしたスマイルの分析から、本研究は相槌というある種特殊な会話要素だけでなく、スタンス・テーキングを含んだ包括的なインタラクション分析へと発展していった。書き起こされたインタラクションは、ともすると平面的にとらえられがちだが、3Dの「空間」として捉えられ、分析されるべきである。そこで、図1で示されるようなインタラクションを分析する4層の分析枠組み

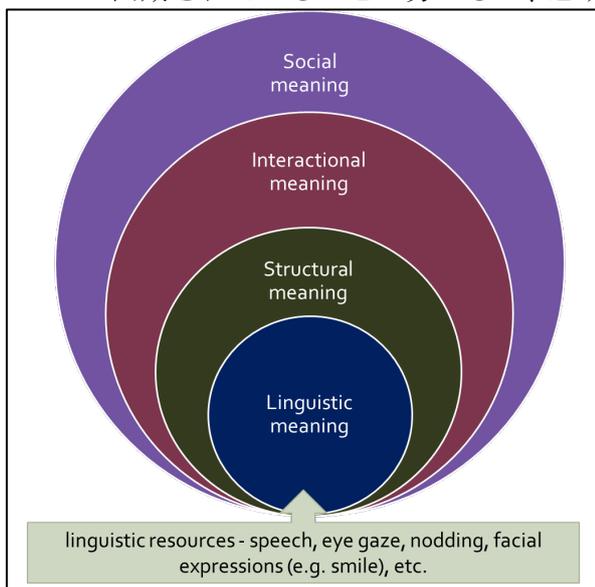


図1 Interactional Space Model (Interactional Space Model) を提唱した。イ

インタラクションにおいて、ある言語的リソース（スピーチ、ジェスチャー、表情など）は同時に4つの意味層で機能することができる。スマイルを例に挙げると、ひとつのスマイルは言語的意味（ユーモア、感情など）、構造的意味（発話開始、ターン調整など）、インタラクション的意味（同調、スタンス表示など）、そして社会的意味（ラポールの形成、発展など）を一度に持つことができるのである。この **Interactional Space Model** を使用することで、さまざまな言語リソースの意味と機能を詳細に可視化できることが明らかになった。

（3）ELF 分析から

提唱した **Interactional Space Model** を応用し、ELF 分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

話者はインタラクションを行う上で、原則としては自分のレパートリーにある言語的リソースしか使うことができない。また、そのリソースの持つ4層の意味は自分の文化圏で理解できる範囲でしか理解することができない。例えば、**Japanese English** 話者 (**JE speaker**) と **Australian English** 話者 (**AusE speaker**) 間で行われた ELF では、**JE speaker** が **Speaker-elicited backchannel** を引き出すための招待行動を繰り返すことにより、**AusE speaker** の相槌頻度がある程度上がることを確認できた。これは、互いに相槌のもつ会話調節機能（構造的意味）を理解し、共有できているからであると考えられる。しかし、**JE speaker** と **AusE speaker** の間でうなづきを介した積極的なラポール構築（社会的意味）がみられることはほとんどなかった。同様に、視線は **Australian English** においてラポール構築の社会的意味を持つが、日本語にはそれほど強い意味は存在しないため、視線を通したラポール構築も見られなかった。これはつまり、**AusE speaker** のうなづきという言語的リソースのレパートリーにラポール構築の社会的意味が登録されておらず、**JE speaker** のレパートリーに視線の社会的意味が登録されていなかったことを示唆する。一方でスマイルを介したラポール構築は確認することができた。スマイルは ELF において社会的意味が共有される有効な言語的リソースであるということになる。

ただし、スマイルもうなづきも、一概に程度と意味を結びつけることはできない。インタラクションの中で使用される言語的リソースは、その都度モデルに当てはめて、4層の意味を解き明かしていく必要がある。

（4）まとめと今後の課題

本研究は、異なる文化と言語背景をもつ会話参与者同士が、どのように相槌やそれに準ずる言語的リソースを駆使してインタラクションを成り立たせるのか、そして、異なる期待を持つ者同士がどのように互いの言語使用の文化的差異を理解し、会話内でのラポールを構築するのかを明らかにすることができた。これまでの会話分析で研究されていたような発音や文法などのバラエティーの言語的特徴に起因する「問題—修復」の構図が成り立つわけではなく、文化的差異の理解はあくまでも表面上の言語的リソースの理解と各自のレパートリー内の意味理解にとどまる。しかしながら、その理解を最大限に駆使して共有できる意味と機能をインタラクション内で発見していくことでお互いのレパートリーに少しずつ近づける努力（交渉と譲歩）をしていることが明らかになった。それはまた、一度新たな意味を理解すれば、それが自身のレパートリーになりうる可能性も示唆する。それこそが、今後の ELF 教育に取り入れられるべきであると考えられる。

一方で、本研究で解明できたインタラクションマネジメント戦略はインタラクション全体を通して行われている戦略のごく一部に過ぎない。今後は、このモデルを応用して、さらなる言語的リソースの意味・機能の解明に努めることが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 池 沙弥	4. 巻 2
2. 論文標題 スマイル×うなずき = ラポール? インタラクション分析を通してみるラポールの協働構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「第2回相互行為と語学教育」予稿集	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Saya Ike and Jean Mulder	4. 巻 14
2. 論文標題 Please smile when you nod: The use of smile in backchannel sequences	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第21回『日本語用論学会大会発表論文集』(Proceedings)	6. 最初と最後の頁 153-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Saya Ike and Jean Mulder	4. 巻 13
2. 論文標題 1.Rapport-oriented vs. Stance-oriented Backchannel Sequences in ELF Interactions	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第20回『日本語用論学会大会発表論文集』(Proceedings)	6. 最初と最後の頁 191-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Saya Ike and Jean Mulder
2. 発表標題 Smile in interaction: (Re)conceptualizing roles
3. 学会等名 Facial Gestures in Interaction 2nd International Workshop (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Saya Ike
2. 発表標題 スマイル×うなずき = ラポール? インタラクション分析を通してみるラポールの協働構築
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画 シンポジウム 第2回 相互行為と語学教育
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 James D'Angelo and Saya Ike
2. 発表標題 English in Japan: The Applicability of the EIF Model
3. 学会等名 24th Annual Conference of the International Association for World Englishes (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池 沙弥
2. 発表標題 インタラクションのBackchannel Sequenceにおけるスマイルとスタンスの関係性
3. 学会等名 第10回動的語用論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 James D'Angelo and Saya Ike
2. 発表標題 Extending Schneider 's Dynamic Model to Non-PCE: The Japan Context
3. 学会等名 23rd IAWWE Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Saya Ike and Jean Mulder
2. 発表標題 Please smile when you nod: The use of smile in backchannel sequences
3. 学会等名 The Annual Meeting of the 21st Pragmatic Society Of Japan (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Saya Ike and Jean Mulder
2. 発表標題 Rapport-oriented vs. Stance-oriented Backchannel Sequences in ELF Interactions
3. 学会等名 the 20th Annual meeting of Pragmatic Society of Japan (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Saya Ike and Jean Mulder
2. 発表標題 Pragmatic Accommodation in Backchannel Sequences in ELF Interactions
3. 学会等名 50th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Saya Ike
2. 発表標題 Smile in ELF: Collaborative stance taking
3. 学会等名 Taiwan ELF13 (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 田中 廣明、秦 かおり、吉田 悦子、山口 征孝 (編) 池 沙弥	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 312
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて 第3巻 (第4章 インタラクションのあいづち連鎖に伴うスマイルとスタンスの関係性)	

1. 著者名 名古屋外国語大学出版会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 名古屋外国語大学出版会	5. 総ページ数 134
3. 書名 アフターハイスクール	

1. 著者名 Sarah Buschfeld & Alexander Kautzsch (Eds), Saya Ike & James D'Angelo	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 440
3. 書名 Modelling World Englishes A Joint Approach to Postcolonial and Non-Postcolonial Varieties (Ch 9 English in Japan: The Applicability of the EIF Model)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------